岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第184号（2023）9－30

日本の教育学は新カント派をどう読んだのか

― 篠原助市文庫の書誌調査から ―

宮本　勇一　・　深見　奨平*　・　佐藤　宗大**

本稿は，「篠原助市教育学の形成過程に関する教育学説史的研究：新カント派受容に着目して」の一環として，京都大学教育学部図書館の篠原助市・陽二文庫の書誌調査から，戦前期日本の教育学者が新カント派のテクストの「どれ」を「いつ」「どのように」読んだのかについて，篠原助市の生涯と彼の著作『教育の本質と教育学』（1930年）に焦点を当てて検討したものである。書誌調査から，篠原助市文庫のほとんどが陽二のものであることがわかった。篠原は学校に務めていたころにナトルプの解説書から新カント派に出会ったが，本格的にこれに習熟するようになるのは京都帝国大学入学以後であることがわかった。京都帝国大学から東京高等師範学校時代はヴィンデルバント（新カント派のバーデン学派）により重点を置いた読書を重ね，その歴史哲学的指向性を受容するも，その後1923年から1930年までの東北帝国大学時代には，博論執筆に向けてナトルプ（マールブルク学派）を深めており，バーデン学派の思想的成熟は『本質』執筆以後の1930年代に成し遂げられたことがわかった。篠原の『本質』における新カント派受容をナトルプに限定し，その解釈を「補完･敷衍」「憑依・同調」「当馬・対立」という類型で整理した。

Keywords：篠原助市，新カント派，ナトルプ，戦後教育学

Ⅰ．問題設定と研究の目的

隣接諸科学に対する教育学の学的自律性や国際性・学際性が問われる昨今の状況下にあって，日本及び海外の教育学の学的基盤の形成・発展過程が（再）検討されている（小笠原ほか2014; 2020）。この文脈において，1910年代から1930年代ごろにかけての教育学における新カント派受容は，哲学からの学的自立，また学知の国際的・学際的な架橋という点で，教育学説史上のターニング・ポイントと言える。

新カント派の日本への受容については，主に哲学学説史において，日本の哲学者の思想的結びつきや実際的交流の展開に関する実証的検証が進められている。その成果によれば，カント及び新カント派は，明治期帝国大学設立時直後から大正期にかけての哲学講座の焦眉の検討対象となり，その後の日本の哲学的諸概念の基本的理解を形成してきた（大橋2016; 大橋2018）。戦前期の日本の教育学者らは，こうした新カント派の影響の色濃い哲学講座にあってその思想と学的体系を構想したのである。

当時「新カント派のメッカ」として多くの教育学者を輩出し，戦前期哲学―教育学の思想的形成に対して大きな影響を与えたのが京都帝国大学である（矢野2021）。篠原助市もまた京都帝国大学で朝永三十郎や西田幾多郎らのもと，カントや新カント派の諸著作の購読，輪読会を通して思索を深めた。

日本の教育学・哲学の学説史研究は，教育学の形成における学的自律性と諸隣接学問との関係・新カ

岡山大学学術研究院教育学域　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
*宮崎大学教育学部　889－2192　宮崎市学園木花台西１－１
**日本女子大学人間社会学部　112－8681　東京都文京区目白台２－８－１

How did Educational Scholars in Japan Read Neo-Kantian? Bibliographic-Research on Shinohara Library

Yuichi MIYAMOTO, Shohei FUKAMI*, and Takahiro SATO**
Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
*Faculty of Education, University of Miyazaki, 1-1 Gakuen Kibanadai-nishi, Miyazaki 889-2192
**Faculty of Integrated Arts and Social Sciences, Japan Women's University, 2-8-1, Mejirodai, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8681

ント派受容の実態解明・京都帝国大学という思想的磁場の重要性の３点を究明してきた。こうした３つの研究が交叉する焦点にいるのが，戦前から戦後にかけての教育学者，篠原助市である。篠原の思想形成と新カント派がどのように結び付きうるのかを検討することは，大正期から昭和戦前期における教育学の学説的特質及び新カント派の位置づけを確かめる上で範例的な知見を提供してくれる。

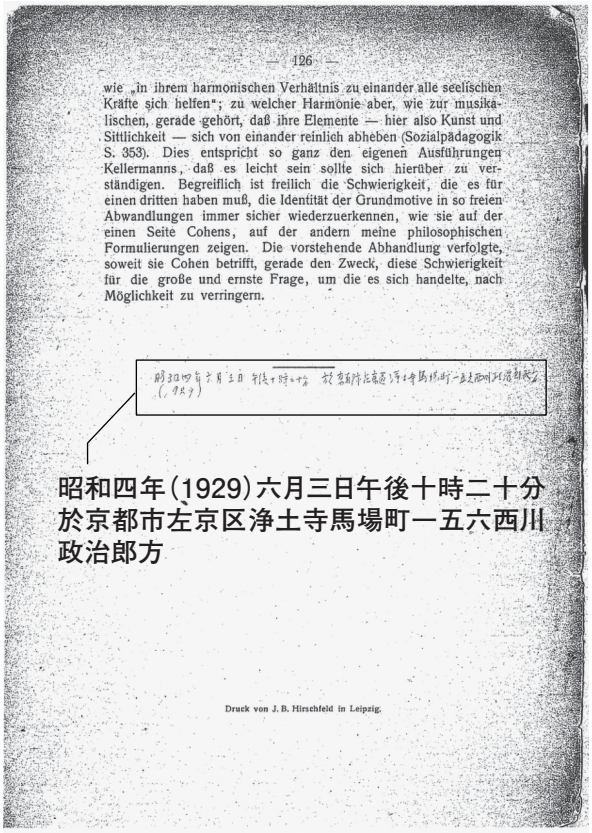
木内（1994）はすでにこれに着目し，1922年までの篠原の著書を対象として篠原の学的基盤を調査した結果，「大正期の篠原とナトルプを強く結びつける従来の見解に対して，否定的な結論が導かれたように思われる」（39頁）と結論づけている。いわく篠原は京都帝国大学入学時点でたしかにドイツ教育学の動向を正確に視野に収めていたものの，その関心はヴィンデルバントをはじめとする新カント派の内で主に価値哲学・歴史哲学を扱ったバーデン学派や人格的教育学へと向けられていたという。これに対し，ナトルプとの取り組みについては，主著『社会的教育学』を熟読した形跡が見られず，「自然の理性化」概念との内在的な結びつきも確認し難い，むしろ，「自然の理性化」で示された自然と理性との対立は，「ヴィンデルバント的な事実と規範の二分法を念頭において精緻化されている」（同上，40頁）のであり，1922年の時点でナトルプが篠原の学的基盤を形成していたとは考え難いという。

本研究の結論を先取りしていえば，篠原が1930年に著した『教育の本質と教育学』（以下，『本質』）には，彼がナトルプの学説を意図的・戦略的に活用して自身の理路を組み立てるに至っていることが確認される。特に，篠原の教育の本質的な規定を「自然の理性化」として定式化する『本質』第３章や第５章において，篠原はナトルプをはじめとする新カント派の諸学説を積極的に受容しているのに対し，学問・科学としての教育学の基礎づけを行うメタ理論的な部分では，第９章に見られたように自説を際立たせるための対抗軸としてこれを据えていた。1922年から1930年の『本質』までの間に何があったのか。木内の解明した1922年までの思想形成期も視野に入れながら，篠原がいつ，どの学説を，どのように読んだのかについては，いまだ解明の余地が残されている。

このことを理解するために，本研究は京都大学教育学部図書室所蔵の篠原助市・陽二文庫の書誌調査を行った。ここに置かれている新カント派書籍を篠原がどのように読んでいたのかを調べることで，篠原の新カント派受容の履歴をより精細に理解することが出来るのではないか。このことから，本稿は，日本における教育学の理論形成過程において新カント派の果たした役割について検討することを大きな目標としながら，戦前期から戦後期にかけて新カント派に依拠した教育学体系を構築してきた篠原助市が新カント派の諸著作をいつ，どのように読んだかを検討することを目的とする。

１．研究対象

本研究の対象となる篠原助市の生涯が，彼の読書歴及び新カント派受容を辿るうえで最も基本的な情報となるため，やや丁寧に彼の生涯をまとめておく（添付表１：篠原助市年表を参照）[1]。篠原助市（1876-1957）は，東京高等師範学校を卒業後，福井県の師範学校で教諭・主事を務め，1913年に京都帝国大学文科大学哲学科に入学する。1916年卒業後，同大学大学院に入学し1919年に東京高等師範学校教授（大学院退学）となる。1922年２月よりアメリカ西海岸を出発点に，文部省の派遣として米英独に周遊留学する（家庭の都合で米国ニューヨークの地点から一時帰国，1922年12月に再度ドイツ留学へ出発し，ドイツにてシュプランガー，ナトルプ，フリッシュアイゼン＝ケーラー，ラインら諸哲と交流）。大震災直後の1923年９月に留学から帰国し，10月に東北帝国大学法文学部の教授に招聘される。1929年初頭に博士論文を提出し，1930年４月に東


— 126 —

wie „in ihrem harmonischen Verhältnis zu einander alle seelischen Kräfte sich helfen"; zu welcher Harmonie aber, wie zur musikalischen, gerade gehört, daß ihre Elemente — hier also Kunst und Sittlichkeit — sich von einander reinlich abheben (Sozialpädagogik S. 353). Dies entspricht so ganz den eigenen Ausführungen Kellermanns, daß es leicht sein sollte sich hierüber zu verständigen. Begreiflich ist freilich die Schwierigkeit, die es für einen dritten haben muß, die Identität der Grundmotive in so freien Abwandlungen immer sicher wiederzuerkennen, wie sie auf der einen Seite Cohens, auf der andern meine philosophischen Formulierungen zeigen. Die vorstehende Abhandlung verfolgte, soweit sie Cohen betrifft, gerade den Zweck, diese Schwierigkeit für die große und ernste Frage, um die es sich handelte, nach Möglichkeit zu verringern.

昭和四年六月三日 午後十時二十分 於京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方

昭和四年（1929）六月三日午後十時二十分
於京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川
政治郎方

Druck von J. B. Hirschfeld in Leipzig.

図１　篠原文庫書籍　見本

表１　篠原助市・陽二文庫リストから101点の新カント派関連書籍の析出

識別	著者別	数	（集中的な）書き込みが確認される点数
K	カント（全集・訳）	20	６ 純粋理性批判（カッシーラー３） プロレゴメナ・道徳形而上学基礎付け（カッシーラー４） 実践理性批判・判断力批判（カッシーラー５） 単なる理性の限界に於ける宗教（カッシーラー６） 純粋理性批判　上（岩波文庫　天野貞祐訳解：下はなし） 純粋理性批判（独　Meyer文庫版　Zimmerman解）
N	ナトルプ	23	13（日付が助市没後であり，陽二が読んだ形跡が明らかなものは13の中から除外した。） 国民文化と個性文化（1911） 社会理想主義（1920） 哲学入門（1914） 哲学の現在　自己記述（1923） 心理学の対象と方法（1912） 人間性の限界における宗教（1908） 共同体教育（1920） ペスタロッチの理想主義（1919） 一般教育学（1913） ペスタロッチ：その生涯と思索（1909） 社会教育学（1922） 社会教育学全集第一巻（1907） 教育心理学（1901）
Co	コーエン	2	―
Ca	カッシーラー	7	―
W	ヴィンデルバント	9	２（どちらも章の一部を詳しく読んだ模様） 哲学序曲（１・２巻）（1915） ドイツ哲学の最盛期（1911）
Rt	リッカート	6	３ 哲学の根本問題（1934） 生の哲学（1922） 自然科学的概念形成の限界（1913）
Rl	リール	4	―
H	ヘーニヒスヴァルト	5	―
J	日本の新カント派研究	5	― 1点に部分的に記されている他は贈呈書で本を開いた形跡なし
Z	その他	20	―

京文理科大学教授，学位取得，及び９月に『本質』（博士論文）を出版。1934年９月に文部省入省以後，教育調査部長，文政審議会幹事などを務め，1936年９月には日本諸学振興委員会の常任委員も務めるが，伊東延吉[2]の文部次官就任を機にすべての公職を辞職。1941年に東京文理科大学を退官し，以後東京都豊島区長崎南町（1945年消失）と神奈川県湯河原吉浜の別荘を往来して1957年の死没まで執筆生活を続ける。

先行研究は従来より篠原を新カント派の系譜に位置づく人物として捉えてきた（木内1994; 木内2001）。同時代の渡部（1922）においてすでに新カント派哲学を教育学に受容した代表的人物として篠原は位置づけられているほどに影響力はつよい。しかし，これとは異なり，「篠原の理論展開だけに集中し，引用が選択され配置される思想基盤に焦点化して篠原のテクストを読み直すとき，篠原の理論展開の図式は生の哲学と新カント学派，そしてフィヒテの自覚概念への接近という西田の図式と同型のものである」（矢野2021，55頁）と，矢野は篠原の教育学説を西田の影響のもとで読み解いている[3]。本研究は，篠原教育学説における諸系譜の影響関係の濃淡を見つけ出して，これらの先行研究の見解の総合的な検証を施すまではいかない。むしろ，新カント派を実際に篠原がいつ，どれくらい，どのように読んでいたかを整理することで，新カント派としての篠原か京都学派としての篠原かという考証のための基礎研究的位置づけを得ることを目指している。

先述の通り，木内（1994）によれば，1901年小学校訓導時代に河野清丸，瀬川頼太郎とともに読んだ『教育学書解説』で新カント派のうちのナトルプとはじめて出会ったとされる。しかしその後，「よ

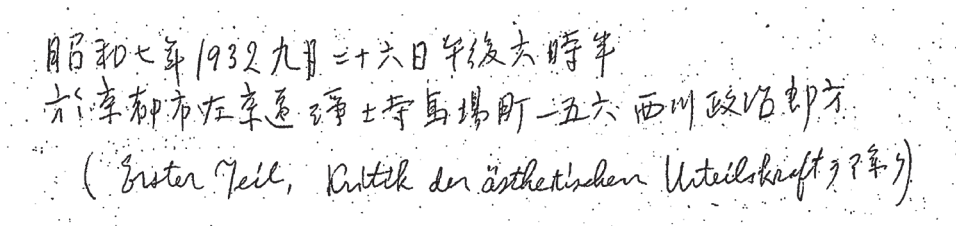


図２　篠原文庫書籍　見本（カッシーラー版５巻　判断力批判末尾）

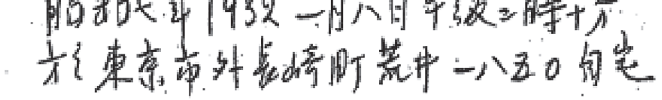


図３　篠原文庫書籍　見本（カッシーラー６巻　実践理性批判末尾）

り研究の過程に即してみれば，篠原はナトルプの主著を座右に置きながらも，ナトルプについて（欧文・和文の）二次文献，あるいはナトルプが自己の立場を簡略に述べた雑誌論文等に大きく依拠して」いたという（27，31頁）。京都帝国大学にはナトルプよりもヴィンデルバントに傾注しており，1923年の最初の著作『批判的教育学』では，ナトルプを「熟読玩味した形跡が見られない」と結論づけている。木内が着目した篠原の思想形成期におけるナトルプ受容の過程を踏まえつつ，本稿は，篠原の読書歴の精細な検証を行うこと，そして篠原の教育学説の確立とされる1930年の『本質』におけるナトルプの位置づけについて吟味することをもって，篠原助市と新カント派（及びナトルプ）との思想的対峙過程の検証を進めることとする。

２．分析の対象と方法

本稿の目的の達成のために，

①篠原助市は新カント派の書籍のどれをいつ読んだのか

②篠原は新カント派の書籍をどのように読んだのか

③篠原教育学説における新カント派受容は，当時の日本の哲学・教育学説における新カント派受容においてどのような特質があるか

の３つの検討課題が立つ。ただし，③は他の教育学者や哲学者らの新カント派受容との比較を行う大規模な作業となるため，上述の通り本稿だけで結論づけることは出来ない。よって，本稿は①と②について中心的に取り組むこととする。

①篠原助市は新カント派の書籍のどれをいつ読んだのか

まず①のために，京都大学教育学部付属図書館所蔵の篠原助市・陽二文庫（2,753冊所蔵）における書誌分析を行った。新カント派関連書籍（101点）の内，カント，ナトルプ，リッカート，ヴィンデルバントの著作（計58点）に焦点を当て，これらのうち書き込みのされている書籍(24点)に分析を絞った（表１）。24点に絞られた各書籍に記された読了日やメモ書きを取り出し（図１及び添付表２参照），読書の日付を改めた（表２）。図１は篠原文庫のナトルプ「人間性の限界における宗教」の最終頁に記述された読了日付である。「昭和四年（1929）六月三日午後十時二十分　於京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方」と書かれてある。この作業を篠原助市の年表（添付表１）と照らし合わせ，いつどれを読んだのかについて整理を行った。

②篠原は新カント派の書籍をどのように読んだのか

②については，篠原助市の新カント派受容として，回顧録等（篠原1956）や同時代の研究者による篠原評（渡部1922）においても注目されてきたナトルプがどのように篠原教育学の中に組み込まれているかについて，『本質』（1930）を検討対象に絞って分析した。まずは篠原自身が明示的にナトルプを用いて議論を展開している部分に光を当て，判明した限りにおいて篠原がナトルプ的な論理展開をしている部分にも光を当て，篠原のナトルプとの対決・受容過程を明らかにすることに絞った。

Ⅱ．分析結果と考察

１．１　篠原助市はいつ・どれを読んだのか

書籍に書き込まれた読了日を見ると，その多くに「京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方」と記されていた（図２，図３）。回顧録の記述（篠原1956，336頁）と合わせると，読了日に同地にいたのは助市ではなく息子の陽二であることがわかった。

表２　書籍に記入された日付からの読書歴（添付表２参照）

○カントの読書歴	
1915年４月頃	純粋理性批判（ドイツ語・文庫）場所不明（助市：1929年の可能性）
1915年11月19日	実践理性批判（ドイツ語・文庫）読了　場所不明（助市）
1923年２月	ドイツ・ベルリンで大量の図書購入　カッシーラー版全集を入手
1929年12月３日	純粋理性批判　上（日本語・岩波）読了　京都（陽二？）
1931年２月９日	単なる理性の限界における宗教（ドイツ語・全集６）第一部・第三部の一部を読了　場所不明（陽二？）
1931年９月26日	カッシーラーによる「カントの生涯」（ドイツ語・全集11）
1931年10月22日	プロレゴメナ（ドイツ語・全集４）読了　京都（陽二？）
1932年１月８日	実践理性批判（ドイツ語・全集５）集中的読了　東京（陽二？）
1932年２月24日	道徳形而上学基礎づけ（ドイツ語・全集４）集中的読了　京都（陽二？）
1932年４月11日	判断力批判（ドイツ語・全集５）第一版　序まで読了　東京（陽二？）
1932年９月26日	判断力批判（ドイツ語・全集５）第二版　序と第二部読了　京都（陽二？）
1933年３月20日	純粋理性批判（ドイツ語・全集３）集中的読了　場所不明
○ナトルプの読書歴	
1917年６月25日	ペスタロッチ（ドイツ語）部分読了　（助市？：1931年の可能性）
1923年５月２日	ナトルプから直筆のサインを哲学の現在にもらう
1927年11月２日？	社会理想主義（ドイツ語）読了　場所不明（助市？：1952年の可能性）
1927年12月７日？	共同体教育（ドイツ語）読了　場所不明（助市？：1952年の可能性）
1929年６月３日	人間性の限界における宗教（ドイツ語）読了　京都（陽二？）
1929年10月19日	社会教育学（ドイツ語）読了　京都（陽二？）
1930年５月９日	ペスタロッチ（ドイツ語）再読了　京都（陽二？）
1930年５月25日	ペスタロッチの理想主義（ドイツ語）読了 京都（陽二？）
1937年11月17日頃	一般教育学を読んでいる形跡あり　場所不明（陽二？ 1952年の可能性）
○リッカートの読書歴	
1916年９月19日	自然科学の概念形成の限界（ドイツ語）　読了　場所不明
1924年７月11日	生の哲学（ドイツ語）　読了　場所不明

二高では成績も良く，東京で健一［助市の長男］と同じ下宿でいてくれれば経済的にも助かるのを本人は強いて京大へと聞き入れず，千穂［助市の妻］の友人の紹介で浄土寺馬場町の下宿で教育学を修めたのである（この下宿に陽二は京都を離れるまで十年以上もおちつき，結婚まで動かなかった。その間東京から京大に講義に来る教授連もしばしばこの下宿に滞在していた）。彼が教育学を修めたのは幸か不幸か，今にもわからないが――小西先生［小西重直：京都大学教授　教育学］も始めは賛成されなかったらしい――ともあれ，私の集めた教育学の文献は多少役に立ったらしく，その一部分は大戦中小包で京都に送り[4]，残りの部分は埼玉県に疎開してあったのをほとんどすべて現在の勤務先である京大の研究室に移した。（篠原1956, 336頁，[]は引用者注，下線部強調は引用者）

篠原陽二は1908年，篠原助市の次男として生まれた。助市が東京高等師範学校（～1923年９月）にいるときは，東京高等師範学校附属中学校（～1924年３月？）に，助市が東北帝国大学にうつったときは仙台の旧制二高に進学し（1924年４月），京大への進学と教育学の志をかたくなに保った。助市が東京文理科大学を1941年に退官した際の後任も陽二が務めている。ほかの兄弟とは違ってことごとく助市のキャリアにぴったりくっついている。その陽二が，京都帝国大学に入学するのは，鈴木（2023）によれば1928年４月であり，1931年３月に卒業，そのまま大学院に1935年までいたとされる（201頁）[5]。そこから10年近く，左京区浄土寺馬場町に住んでいたと篠原は述べている。篠原が東京文理科大学に勤めていた1936年に京都帝国大学での教育学特殊講義の依頼を受けた際にも「浄土寺馬場町の次男陽二の下宿で二週間ばかりを過ごした」と書いている。陽二がいつこの下宿を出たのかは不明であるが，篠原が10年以上と書いていること及び1939年にはすでに結婚しているため，1928年から早くとも1938

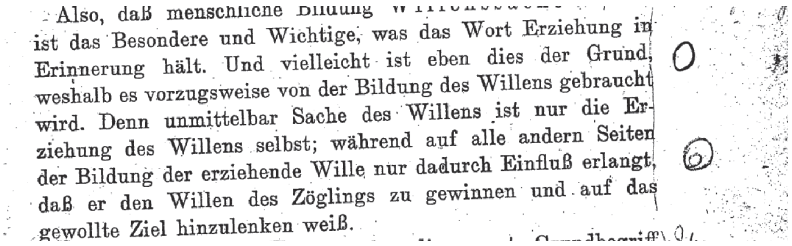

Also, daß menschliche Bildung
ist das Besondere und Wichtige, was das Wort Erziehung in
Erinnerung hält. Und vielleicht ist eben dies der Grund,
weshalb es vorzugsweise von der Bildung des Willens gebraucht
wird. Denn unmittelbar Sache des Willens ist nur die Er-
ziehung des Willens selbst; während auf alle andern Seiten
der Bildung der erziehende Wille nur dadurch Einfluß erlangt,
daß er den Willen des Zöglings zu gewinnen und auf das
gewollte Ziel hinzulenken weiß.

図４　助市らしきメモ　濃い○と◎と縦の傍線（ナトルプ　社会的教育学）

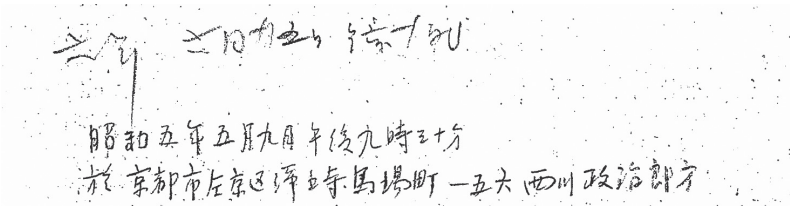

昭和五年五月九日午後九時三十分
於京都市左京区浄土寺馬場町一五六　西川政治郎方

図５　助市らしきメモ（上段簡易日付（1917年６月25日）と陽二らしきメモ（下段詳細日付（1930年５月９日（ナトルプ　ペスタロッチ末尾）

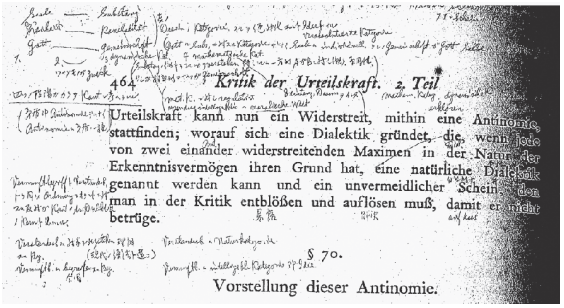

Kritik der Urteilskraft. 2. Teil
Urteilskraft kann nun ein Widerstreit, mithin eine Antinomie,
stattfinden; worauf sich eine Dialektik gründet, die, wenn jene
von zwei einander widerstreitenden Maximen in der Natur der
Erkenntnisvermögen ihren Grund hat, eine natürliche Dialektik
genannt werden kann und ein unvermeidlicher Schein, den
man in der Kritik entblößen und auflösen muß, damit er nicht
betrüge.
§ 70.
Vorstellung dieser Antinomie.

図６　陽二らしきメモ　非常に細かい線とメモ（カント全集　判断力批判）

年頃，遅くとも1939年まで，京都の浄土寺馬場町に住んでいたことがわかる。

すると，このことから，ナトルプ，カントに記された読書記録のほとんどは助市のものではなく，次男の陽二によるものであるということがわかる。ただし，いくつかの不明点も分析結果としてわかった。以下，結果を箇条書きする。

結果１　助市と陽二でメモの癖の違いがあることがわかった（図４・図５・図６参照）。

判別を全てにできるわけではないが，年数に幅があっても文庫で渉猟した図書への書き込みは，（一点における青ペンでの書き込みを除いて）太い鉛筆か非常に細い鉛筆かのどちらかで書かれていることが分かった。前者が助市で，後者が陽二であることは読了日との照合で判明した。

太い鉛筆の場合は余白に大きめの文字でメモがなされ，重要部分に「○」「◎」と縦に傍線を引く癖がある（図４）。読了日の記述も「六年六月廿五日　午前十時」のように短めに書くことが多い（図５）。

細い鉛筆の場合は余白にびっしりと書き込みとメモが細かく書かれ，段落ごとをまとめる単語が記入されたり，前後で関連する箇所を参照させるメモなども書かれており，非常に精細に読んでいることがわかる（図６）。特にナトルプ関連著作には，頁内の同じ単語が線で結ばれていた。読解のメモのようには見えないが，翻訳のための基礎作業であれば納得がいく。社会的教育学，社会理想主義の翻訳を出版した陽二のものである可能性が高まる。

結果２　1928年以前の読了歴のものはおよそ間違いなく助市のものである。

特に表２の1915年の４月と11月のカント読書については，回顧録に，京都帝国大学二回生（1914年９月～）から西田幾多郎の下で純粋理性批判の輪読会を行ったという記述があり，時期がほぼ合致する。ここで篠原がカントの原文を初めて読んだ可能性が非常に高い。1914年から半年かけて純粋理性批判を読み，続けて実践理性批判を（一人か輪読かは不明）読んだものと思われる。また，ナトルプの『ペスタロッチ』とリッカートの『自然科学的概念形成の限界』を大学院時代に，ナトルプの『社会理想主義』と『共同体教育』及びリッカートの『生の哲学』を東北帝国大学時代に助市が読んでいたとわかる。特に東北帝国大学時代の読書はどれも『本質』において引用されていることから博論への準備とし

て読んでいた可能性が極めて高い。

結果３　1929年から1933年にかけて，集中的で体系的なカント・ナトルプ読書を陽二が大学院時代に行っている可能性が高い。

1929年から1933年にかけて日本語の純粋理性批判を読んだのち，以後ドイツ語版全集を用いて，宗教論→カッシーラーの解説→プロレゴメナ→実践理性批判→道徳形而上学→判断力批判→純粋理性批判を集中的に読んでいる形跡がある。また，ナトルプの諸著作も1929年ごろに４冊読んでいる。陽二は1931年に学部を卒業しているらしいため，卒業論文を書き終えたか書いている頃にカント及びナトルプを読みはじめ，そのまま大学院にかけて体系的集中的に読んでいたということがわかる。

逆に言えば，助市は，純粋理性批判と実践理性批判以外のカント著作を読んだ形跡は文庫調査からは明らかにされないことがわかった。

１．２　追加分析結果　篠原助市の回顧録からの読書歴の析出

以上の分析結果によって，篠原助市の読書歴が非常に限定的にしか解読できなかったことから，本研究では追加で回顧録（篠原1956）より，読書歴・講義歴について自身が述べているものから，彼の新カント派に関わる読書歴を探ることとした。その結果を反映したのが表３である。

木内（1994）も明らかにしている通り，篠原がナトルプを初めて読んだのは，愛媛県の小学校教員を務めていた1901年であり，それから高等師範学校で大瀬甚太郎の「社会的教育学」を聴講したほかは，ヘルバルト，ヘルバルト派，そしてライ・モイマンら実験心理学，ヴントやデューイなど幅広く当時の教育思潮を読み開いており，こと新カント派著作の読書についての記述はない[6]。そのため，読書歴として以下に挙げたのは京大時代以降のものとなる。西田と始めた純粋理性批判輪読のほかに，夏休みを使ってコーヘン，ナトルプ，ヴィンデルバントを読み広げており，特にナトルプよりもヴィンデルバントに興味を持ったと述懐している。ナトルプについては，京大時代に，『本質』でも用いられている『哲学と教育』は読んでいるものの，ナトルプの主著である『社会的教育学』の読書歴は不明であり，卒業後の1917年頃にも「ナトルプは当時生嚙り」（篠原1956，209頁）と述べるように熟読した形跡はない。

篠原がナトルプを深く知るようになるのは，1923年以降，東北帝国大学で博士論文（『本質』）を準備執筆するころからである。特に執筆時期と見られる1928年末から1929年の前までに，『本質』で引用される文献は読了されている。東京文理大学に戻る1930年以後では，講義や演習で積極的に用いているが，その後は新カント派に関わる集中的な読書をした記録はない。

以上が書誌調査の結果である。これにより，篠原がナトルプやカント，新カント派の何をいつ読んだのかに関わる資料の状況が明らかになった。次に，篠原がこれらの書籍をどのように読んだのかについて，1930年に執筆された『本質』におけるナトルプ受容を分析し，その結果をまとめる。

２．篠原は新カント派の書籍をどのように読んだのか

もともとは学位論文として提出され，1930年に出版された『本質』は，篠原の著書の中でも２つの意味で特異な複雑性を有する。第一に，本書は，自－他の弁証的関係による「自然の理性化」に，ディルタイらの歴史的方法から洞察を得た先代から後代への関係が加わることで，新カント派のマールブルク学派とバーデン学派，さらには人格的教育学や精

表３　回顧録からみる読書歴

○ナトルプの読書歴	
1915年？夏	精密科学の論理的基礎（回顧録）
	哲学と教育学（回顧録）
1920年８月	社会理想主義　読了（回顧録）
1923年１月頃	社会的教育学（留学中・家庭教師の作文指導の教材として）（回顧録）
1930年４月―？	社会的教育学（助市　東京文理大　演習）（回顧録）
○ヴィンデルバントの読書歴	
1914年または15年？	ヴィンデルバント「哲学入門」（西田講義　哲学概論）（回顧録）
1915年？夏	プレリュディーン（１・２），意志の自由（回顧録）
1915年秋？ 1916年春？	プレリュディーン「発生的方法と批判的方法」（西田講義）（回顧録）
○コーヘンの読書歴（回顧録）	
1915年？夏	純粋認識の論理学

神科学的教育学が混在する様相を呈している。第二に，本書は教育の本質についての記述（対象理論：第１章―第７章）にあたる部分と，学問・科学としての教育学についての記述（メタ理論：第８章―第11章）にあたる部分を併せもっている。これらの複雑性を有するゆえに，学位論文の審査で他ならぬ篠原自身が『本質』を指して「女児の雑巾ぬい」（梅根 1970，261頁）と自白せざるを得なかったというのも然もありなんと言えよう。

内容面で多岐にわたる『本質』は，彼の多面的・多層的な思想の受容の痕跡が残り，かつその後の篠原の理論的探究の論点が胚胎されている点で分析に値する。その中でナトルプの扱われ方は一様であるのか，それとも多様であるのか。対象理論かメタ理論かによって，ナトルプに対する態度に差異があるのか。こうした視点に立って，以下では『本質』の第３章「個人および社会と教育」，第５章「陶冶と教育及び教授」，第９章「教育学の方法と体系」を具体的な分析対象として選出した。『本質』の巻末索引や注から見て，第３章と第５章は特にナトルプ引用が集中している。また，第３・５章の内容が対象理論的であるのに対し，第９章はメタ理論的な内容であり，ナトルプ引用も少なからず見られる。以下では，篠原がナトルプを取り上げる箇所を具体的に参照しつつ，各章でのナトルプに対する篠原の態度のあり方と，その章ごとでの差異を明らかにする。

第３章「個人及び社会と教育」の分析――個人と社会との関係における新カント派

『本質』第３章では，「一定の意図に導かれ個人の発達に影響するもろもろの作用」（篠原1930，17頁）という教育の定義に基づき，個人と社会との関係について論じられている。この章の中で篠原はナトルプを自身の理論の骨格に据えつつも，ナトルプの指摘した論理を延長させることでこれを補完・敷衍しようとする記述が目立っている。

新カント派受容と関連してこの章で特徴的なのは，ナトルプ著作の明示的引用やナトルプへの直接的言及の多さである。無論そのことだけをもってナトルプからの影響が強いと論じることはできない。しかし少なくとも，第３章の行論を構築する上でナトルプが一定の役割を果たしていることは指摘しうると考えられる。問題は，その役割の内実である。

まず篠原自身の主張を見ると，繰り返し強調されているのは，篠原が問題としたい社会概念は「共同社会Gemeinschaft」としての社会であるということである。つまり社会とは「先ず個人あって，然る後，一定の企図に基づいて社会を構成する」というものでも，あるいは「個人とは異なった一種の有機体」――篠原はこれらを「組合 Gesellschaft」と呼んで区別する――としてのそれではない（同上，75頁）。個人と社会とは循環的発展をなすものであり，一方が一方によって基礎付けられているものではないのである。

「人間は只人間的社会を通じてのみ人間となる」（ナトルプ1958，114頁）。ナトルプもまた，個としての人間の形成に対する社会の役割を重視していた。またナトルプは「社会」という概念に言及するとき，その多くでGemeinschaftという語を用いている。たとえば『社会的教育学』（1899）の副題「社会の基礎に立つ意志教育の理論」も原典では“Theorie der Wissenerziehung auf der Grundlage der Gemeinschaft”であり，篠原におけるGemeinschaftとしての社会という発想も，そのルーツはナトルプにあると考えられる。

その一方で，篠原とナトルプとの行論との間には微妙に異なる点も見られる。

ナトルプにおいては個人の形成と社会の形成とが相互的な関係にあるのは，（諸）個人の意識の持つ法則性が，Gemeinschaftとしての社会の持つ法則性と根源で統一されるからである。「意識と意識とは相排除せず，却って意識そのものに固有な，統一，即ち理念の統一への傾向に依って寧ろ相結ぶ」（ナトルプ1958，117頁）。したがって，確かに個人を抽象的存在として議論するのではなく，「家庭にはじまり，自治体及び国家に，結局は人類に至る種々の形の組織された人間社会に対する各個の関係」（同上，124頁）を問題にするとはいえ，志向されているのは個人の意識の形成発達による，いわば叡智的統一なのである。そのため，議論の総体として，「個人を離れては社会はない」という点については説明が棚上げにされている印象を受ける。

一方篠原は，「社会を離れて個人はないと説くと共に，直ちに個人を離れて社会はないと説くは，一の循環ではないか」（篠原1930，80頁）と，ナトルプの議論の問題点を指摘する。そして，この「循環」を解決するためには「個人及び社会を静的に与えられたものとして見ないで，二者共に動的に発展しつつある，しかも，動的な，個人及び社会の発達は一の循環を予想しないでは成立しないし，寧ろ，二者の発展其の者が循環的発展である事を証する」（同上）ことが必要であると主張する。では，この個人と社会との「動的」側面，つまりは循環的発展のダイナミズムをどのように描くのか。篠原の答えは，社会を「問と答との関係」「問答に於て一が他を予想しつつ，一が他を促進しつつ，補充しつつある相互関係」（同上，86頁）として捉えるというものであっ

た。篠原は「問」と「答」の往来としての「対話」（dialogue）と弁証（dialectic）が同根の語であることに触れながら，問答において新たな意味が生成されていくこと――これを「社会的総合」と呼ぶ――によって，社会は「個人――離れ離れのもの――以上のものを含む」のであると主張する（同上, 87頁）。つまり篠原は，問答関係としての自－他関係を措定することによって，その自－他関係によって構築されるGemeinschaftとしての社会の発展を描くとともに，そのことにおいて，個人と社会との相互的関係を説明したのである。

以上のことから，篠原が個人と社会との関係性に関して，屋台骨をナトルプの言説に依拠しつつ，その限界を「問いと答えの弁証的関係」として社会を考えることによって補完しようと試みていたことが明らかとなった。したがって，篠原の言説には「新カント派」，とりわけナトルプの影響が見られるものの，同時にそれを乗り越えようとする独創性も存在するのである。

第５章「陶冶と教育及び教授」の分析――教育・陶冶・教授の体系化におけるナトルプの位置

篠原が，陶冶，教育，教授という教育学の中心概念の体系化を試みている第五章「陶冶と教育及び教授」では，ナトルプの学説を積極的に受容し，この立場に立って教育体系を構築し，諸理論を批判していることがわかった。教育の体系化に当って，篠原はまず陶冶概念の先行研究として，ヴィルマンとラインを挙げ，陶冶が知的側面の教授的過程ばかりを強調する点をフリッシュアイゼン＝ケーラーとともに批判し，広くほかの先行研究をあたって陶冶概念を確定する作業を試みている。そこで参照されるのは，順にナトルプ，パウルゼン，ペスタロッチ，ディルタイ，シュプランガーである。これらの諸哲学者の定義づけから篠原は共通点と合意点を①「内部的精神本質を出来得る限り，完全な姿に発展せしめ，精神の各方向の完全な統一的連関を将来する事」②「外から姿を与えるのではなくて，内部的形成原理によって内部から構成せられ，自由な自己活動によって始めて成立する」こと，③「陶冶の結果から見ると，夫れは個性の異なるに従い，異なった姿を呈せねばならぬ」ことの３点にまとめ，シュライアマハーの小宇宙と大宇宙の関係で括っている（同上，131-138頁）。

教育の概念定義においても篠原は，ナトルプ，モーグ，ディルタイ，シュライアマハー，ヴィルマンの順に触れ，教育が自己活動の陶冶の「助成作用」であり，これは社会的関係を結ぶことであり，それゆえに教師の意志が子どもの意志を振起し覚醒させる意志関係であるということをおさえていく。一層厳密な教育の定義として篠原が持ち寄るのはヘーニヒスヴァルト，コーヘン，ナトルプの新カント派三名であり，それぞれの引用から，教育は当為の意識を不可避的に呼び込むこと，それゆえに意志の教育であること，これがすなわち自然の理性化である，というような論理展開を施している。

> 私は前に，教育は自然の理性化を助成する活動である，或はヘーニヒスヴァルト流に時間――くわしくは時間的に生起する意識に於て，妥当価値を映写することであるとし，そして時間的意識の妥当価値に対する関係を当為なる語に表明し，当為の意識こそ教育考察の基礎であり，原理であり，出発点――原理Prinzipとは，もと「始め」を意味する語である[7]――と述べて置いた。当為の意識は言う迄もなく，実践的意識であり，意志の領域に属し，「当為は法則的意志に外ならない」（コーヘン）。私は教育的発達は，価値への発達であり，夫れは弁証的発達，永遠の課題としての発達であると考えた。永遠の課題とは，然るに，意志に関して始めて言われ得る。思考における課題としての判断も課題である限り意志の要素を含み，思考も一種の行動である事，寔にコーヘンの詳説した通りである。ナトルプも「客観的方面からは課題として，主観的方面からは意志として現れる」[8]。といっている。即ち，広く，当為の意識を出発点とし，原理とする教育，自然の理性化としての教育は必然に意志の教育を以て其の中核となさねばならぬ。否，意志の教育こそ，教育本来の対象である。（篠原1930，142-143頁）

篠原による教育の定義の中心部分において，明示的に引用参照されているのは新カント派の意志の教育であることがここに明瞭に読み取ることが出来る。

陶冶と教育の概念定義に当って篠原が共通して用いているのはナトルプ，ディルタイ，シュライアマハーの三名であり，教育―陶冶の関係を語るのに「社会性」や「意志」を強調する論調は，明らかにこの三名の内新カント派のナトルプ（及びコーヘン）に帰せられるものである。

陶冶と教育のそれぞれの吟味をした後に両者の関係を問うところで篠原が引用しているのは，社会的教育学の冒頭におけるナトルプの第一節「教育，陶冶，意志，理念」の概念定義である（Natorp 1922: 1-5：ナトルプ1958，23-26頁）。助市文庫の「社会的教育学」の同箇所に助市による◎と下線の強調が

見られる点は，篠原とナトルプの協調的関係を下支えしている。

以上に加えて，篠原によるヘルバルト批判にナトルプ受容を色濃く見ることができる。篠原は，ヘルバルトの教育的教授論が，教授と教育と明確に区分したあまり，教授に知的な任務ばかりを寄せられる「主知説」に立つことを批判する。

> 真への意志なくして真は得られない。即ち教育を離れて教授はない。この意をナトルプは次ぎの如く，表明している。曰く「人間陶冶の中心は意志の教育に存する。知識の教育，更に構想及び感情の教育も之と不可分に，本質的に之に依存する。」と。私は此の意味に於て，教育的教授について語りたい。凡ての教授は教育に依存する，教育を離れて教授はない。ヘルバルトの如く，凡て，教授は教育する，教育しない教授は非教育的であるとの意に於ての教育的教授は，主知説に立たざる以上承認し得べくもない。私はヘルバルトの此の考え方を，正に逆転して，其処に教育的教授の真偽を認める。（篠原1930，148-149頁，下線部強調は引用者）

ここでヘルバルトを主知的であると批判し，主知説からでは教育と陶冶の適切な理解を得られないとする篠原の主張は，彼独自のものではなく，ナトルプ「社会的教育学」後半部における独自のヘルバルト批判であった。このことから，篠原のヘルバルト批判がナトルプに依拠していたと考えることができる。これは社会的教育学の第三編において「意志陶冶の知性陶冶への，ヘルバルトが主張するような一面的な依存は帰結しない」（ナトルプ1958，340頁）というように展開されている。そこでの論点は，ヘルバルトらが，「意志の教育に」も「悟性の教授に」も，それぞれに「全的な且専一の目標がある」つまり教育と教授それぞれにそれぞれ「だけ」の固有の任務とした点である。ヘルバルトらは，道徳性（意志の教育：主意的な側面・過程）を目的として据えていたが，そのためには理解（悟性の教授：主知的な側面・過程）が先行する必要があると説いた。ナトルプいわく「理解の独自の形成法則の下で固有の知的世界がやはり組織されるのであって，この世界は先ず只それのみとして把捉され，承認されることを欲し，且この世界は理解の独自の見地の下に，一切を即ち同時に意志の質料であるものをも，只意志の独自の形式を除いて，包括するのである」（同上，342-343頁）。つまり，ナトルプに拠れば，ヘルバルトらは，世界をまず理解するからこそ（悟性の教授），その先でその世界でどう生きていきたいかという意志の教育に移れると考えていた。するとヘルバルトらにとって，先行する理解の過程に意志の側面を入れられると，理解が著しくゆがんだり即事性を損なってしまうので「意志の独自の形式」をなるべく排除して，理解を純粋に悟性だけに基づかせねばならないとしたのである。

しかしながら，こうした悟性と意志の明確な区分が逆説的に悟性陶冶をなし崩しにするとナトルプは見ている。理解の過程がつまらなすぎるがゆえに，教師は学習者を事物へと没頭させるために「教師の感動」を演じて見せたり「叙述の魅力」で子どもに注意を向けさせたりと，「人為的に関心を喚起し及び興味を抱かせる」パフォーマティヴな「感情影響」という道に踏み込んでしまう。その結果，理解の過程で重要な「即事性は必然に害われ」，「教育的教授の正反対」の事態に陥っていってしまうというのである（同上，343頁）。ナトルプはヘルバルト派における教育と教授の明確すぎる区分による弊害を批判し，ペスタロッチの基礎陶冶論において児童のころから意欲や自発性に依拠した教育説を是として，悟性陶冶と意志陶冶の「厳密な平行」的な発達段階論を展開していくのである。

なおヘルバルト批判は，篠原が依拠するヴィルマンも展開しているところである。しかしながらそこではヘルバルト教育学の個人主義的傾向が批判されており（ヴィルマン1974，242頁），ナトルプによるヘルバルト批判とは違う点のみが指摘されている。むしろヴィルマンはヘルバルトをカントの図式論を忠実に守っている人物と理解し，ナトルプとは真逆の評価を与えた（同上，64頁[9]）。この点，ヘルバルトを批判していく篠原の理路は明らかにナトルプ的である。

第９章「教育学の方法と体系」――教育学の学的性格の記述におけるナトルプの位置づけ

『本質』第８章以降での篠原の考察は教育学の学的性格へと向けられている。とりわけ第９章では，自然科学とは異なる教育学の方法論に焦点が当てられている。以下では，まず第９章の論旨を要約し，その上で篠原のナトルプ引用について検討する。

科学としての教育学の方法とは何であるのか。帰納法は教育学でも問題なく用いられる。しかし，その内実は自然科学とは異なる。というのも，自然科学は事実と結果との必然的・合理的な因果関係を対象とするのに対し，教育学は因果関係を超えた「個性の表現」（篠原 1930，305頁）として現れる非合理性を対象とする精神科学の特徴を有するからである。この特徴ゆえに，帰納法は，多くの事実から共

通項を抽出する方法ではなく，「一つの教育的事実を直視」することで「教育の本質を突きとめる」ための方法となる（同上，307頁）。

帰納法が「具体的な教育現象から純粋な形式に進む」（同上，319頁）ための方法であるとしたら，その逆方向へ，「内容充実への方向」（同上，321頁）に進むのが演繹法である。すなわち，心理学や他の諸科学の結果に基づき，より特殊的な教育原則を導き出す方法である。篠原はただし，ここでの演繹法は「総合的演繹」（同上）であると述べている。その含意は，教育原則は他の諸科学の成果から直接に演繹されるのではなく，上述の帰納法によって得られた教育の本質の認識と照らし合わせることで定立されるということである。

教育学の方法は上述の帰納法と演繹法であることから，教育学は自然科学や哲学，心理学，歴史学等の諸学の成果を直接に応用する技術学には留まらない。むしろ教育学は教育の本質という独自の見地に立ち，「理想的類型」や「歴史的類型」（リッカート，ヴェーバー），および「心理的類型」（シュプランガー，ナトルプ）といった「類型」を導出する役割をもつ。篠原は，生物の「類」概念のように「実在を一義的に規定するといふ構成的意義は之［類型］には宿らない」（同上，328頁）という。むしろ，類型は「個性の特質を明らかにする」ための見地であり，この意味で，「類型は規制的，発見的heuristischな意義を有するに止まる」（同上，329頁）とされている。

以上のように，教育学の方法についての議論から，教育学の学問的自立性の擁立へと至る篠原の行論において，ナトルプにはいかなる位置づけが与えられているのか。第９章には，ナトルプへの言及が３か所に見られる。第一に，「ナトルプは，［…］教育学の方法は演繹法である，夫れは哲学の全系統からの演繹であり，教育学は具体的哲学，又は哲学の応用としての広義の技術学に属すると論じてゐる」（同上，320頁）という箇所。この箇所では，「自立的科学」としての教育学を志向する篠原の立場から，ナトルプの教育学は「哲学の応用としての広義の技術学」に留まると批判している（同上）。

第二に，「ナトルプは，教育の一般的法則は純粋法則科学即ち論理学，倫理学，美学等から演繹せられ，心理学はこの一般的法則を特殊化し，生徒の特殊の状態に適用する役目を演ずるに止まると見てゐる」（同上，325頁）という箇所がある。ここでの心理学は，ナトルプが『哲学と教育学』（1909）で言う再構成の心理学や「タクトの心理学」（Psychologie des Taktes）を指している（同上，325頁）。また，第三に，「ナトルプは已に早く，類型は与へられた個人ではなく，寧ろ可能な個人の総合的形象であり，類型の構成は差異的心理学differentielle Psychologieの任務であると述べてゐる」（同上，332-333頁）という箇所もある。ここでの「差異的心理学」がナトルプのどの著書から引用された用語であるかは不明である。これらの第二，第三の箇所において，篠原はナトルプに心理学的類型というモチーフを見出しつつも，それは篠原が教育活動の手引きとして位置づける類型とは似て非なるものであるとしている。というのも，篠原は，ナトルプの類型は「哲学（純粋法則）→教育学（一般的法則）→心理学（一般的法則の特殊化＝類型化）」という一方向的な演繹の帰結にすぎず，そこには教育現象から帰納的に獲得される教育の本質という見地からの再構成が介在する余地がないと見ているからである。

総じて言えば，教育学の学問論の文脈では，篠原はナトルプを自身と対置的な関係に置き，ナトルプによる教育学の規定を批判することで，教育学の学的自立性を擁護する篠原の立場を特徴づけている。加えて，第９章では『社会的教育学』以外の著書からナトルプの語彙が引用されており，これまで分析した２つの章との差異が覗える。

結果２の要約

以上を通して，『本質』における篠原のナトルプ引用について分析してきた。ここではその結果を，ナトルプに対する篠原の３つの異なる態度に整理することでまとめよう。

第３章で篠原は，個人と社会との関係を論じるにあたり，明確にナトルプを屋台骨としていた。しかし，単なるナトルプ学説の移入に留まるのではなく，個人と社会との統一過程を自－他の動的・循環的発展として再構成し，ナトルプを批判的に乗り越えようとする点も見られた。この点で，第３章での篠原の態度を「補完・敷衍」型と特徴づけることができよう。

これに比して，第５章では，「陶冶」「教授」といった中心概念の規定を得るに際して，篠原がナトルプに大きく依拠していることがわかった。特に，篠原のヘルバルト批判については，ナトルプのヘルバルト批判を反復するようにして，主知説偏重のヘルバルト対意志陶冶・悟性陶冶を調和させるナトルプ・篠原という対抗軸が作られていた。このように限りなくナトルプに近い視点に立つ篠原の態度を，「憑依・同調」型と特徴づけよう。

しかし，一転して第９章では，ナトルプに対する篠原の対立的な態度が目立った。篠原は，ナトルプが教育学の学問論的地位について「哲学の応用としての広義の技術学」という立場に立つとみなし，教

育学の自立性を擁護する自身の立場と対立させることで，その論点を際立たせている。こうした篠原のナトルプに対する態度を，「当馬・対立」型と呼ぶことにしよう。

Ⅲ．成果と課題

１．書誌調査の結果から得られた成果と課題

①カント読書について

彼は京大時代にカントの純粋理性批判・実践理性批判を読んでいた。それ以外は読んだ形跡はない。

②新カント派（ナトルプ）について

篠原はナトルプにはすでに1901年頃に出会うも，これを深めるようになったのは京大時代・留学時代を終えた1923年以降，すなわち『本質』を執筆準備している頃であることがわかった。篠原自身も京大卒業直後にもナトルプ哲学を「生噛り」と 表現して，理解度の浅さを自ら捉えていた。ナトルプの教育学説は主著『社会的教育学』発刊の1899年以後またたくまに広く影響していたこと，しかし1920年代はナトルプの死（1924年），ダヴォス討論（1929）と，新カント派の凋落の時代であったことからも，篠原の新カント派学説の熟達は，時宜を得たものとはいいがたい。それでもなお篠原は主意説のナトルプを精力的に読み続け，②の分析の通り，『本質』（1930年）の著作にその批判的対峙の成果を反映させるに至った。

③新カント派（バーデン学派：リッカート）について

篠原がリッカートを読んだのはごく一部であるが，その影響は『本質』に色濃く表れている。その読書は集中的に1916年と1924年と，京大時代，東北帝国大学時代に大きく割れている。そのうち，『本質』において幾度も参照されるのは1916年に読んでいる『自然科学的概念形成の限界』である。篠原がリッカートに依拠するのは，教育学の学的性格を規定するという関心を議論する際であり，次に見る同学派のヴィンデルバントよりもやや控えめであった。

④新カント派（バーデン学派：ヴィンデルバント）について

篠原がナトルプへの興味を1900年代には示したものの東北帝国大学着任のころまでこれに習熟しなかったのに対し，篠原は京大時代に，ヴィンデルバントによる科学哲学及び歴史哲学としての教育学の理解を深めた。しかしその後長らく著作で表立って扱われることはなく，篠原はヴィンデルバントへの興味を陰伏する関心として持ち続けた。ナトルプの指示で出会ったフリッシュアイゼン＝ケーラー，シュプランガーの弟子ビルケマイヤーに勧められたマックス・シェーラー，そしてこれらの系譜学の元となるシュライアマハーの哲学との出会いを成し遂げた1922－23年の留学は「私の教育に対する見解をかなりゆり動かし」，後の歴史哲学的な志向性の端緒をここで育むこととなる。しかしそれでも留学後はしばらくナトルプの批判哲学に就き，新カント派ヴィンデルバントの歴史哲学とディルタイ派諸歴史哲学によって育まれた関心は，1930年代にようやく実を結び，「自然の理性化」にならぶ「個性の歴史化」の概念へと結晶化されることとなる[10]。

総じて篠原は，京大入学以前は，ナトルプの教育学を見聞し，京大時代はむしろヴィンデルバント・リッカートらバーデン学派を精読した。京大卒業・留学後，博論準備に当ってナトルプ理論を本格的に精読するようになり，『本質』を書き上げた1930年代以降は，バーデン学派の歴史哲学の傾向を強めていった。読書歴から以上の新カント派諸学説の受容を辿ることが出来た。

なお今回の分析で立ち入れなかったのはナトルプのマールブルク学派の先達であり，新カント派を興した中心的人物でもあるコーヘンの篠原による受容であった。京大時代にも読書をしており，『本質』にも非常に多く言及があるため，今後の課題とする。

⑤篠原陽二の読書について

他方で篠原陽二は学部卒業近くから大学院時代にかけて，ナトルプとカントを非常に細かく読んでいたことがわかった。特にカントに至っては，日本語での『純粋理性批判』読書に続いてドイツ語でカッシーラー解説から始め，カント主要著作を三批判周辺まで含めてかなり集中的に読んでいることがわかった。大学院の講義で扱われたにしては時期が局所的であるため，おそらく自学か輪読会のような自発的研鑽であったことが覗える。いずれにしても篠原助市・陽二ともに京都帝国大学において教育学を修めることは西田・朝永・小西などの導きの下でカント哲学，批判哲学に深く従事することを意味していたことが文献調査から言えるであろう。もちろんこのことは，1910年代から30年代ごろの京大においてベルクソンやブレンターノなどその他の哲学学説などがどのように扱われていたかの対比でもってようやくカント・新カント派学説の学修の特質は明らかになるものであるから，この点はさらなる検討の課題として開いておく。

２．『本質』の分析結果から得られた成果と課題

前章での『本質』各章の分析の結果として，「補完・敷衍」型（第３章），「憑依・同意」型（第５章），「当

馬・対立」型（第９章）という形で，篠原のナトルプ受容の多様な有り様を明らかにした。この結果は，篠原の新カント派受容に関する先行研究の成果へと接続されることで，篠原研究および教育学説史に対する新たな知見をもたらすだろう。

加えて，篠原がナトルプを批判的・対立的に受容するとき，ナトルプ以外の誰に依拠していたかという論点も注目に値する。宮本ら（2021）は，篠原教育学の学問論的特徴を「開いた体系」（offenes System）として論じた。「開いた体系」は，篠原がリッカートから引用した用語である。この用語には，通時的･共時的な開放性を原理とし，諸学の成果を「自己の立場から批判的に取り入れる」（篠原 1930，279頁）ことを教育学の存立根拠の基盤とする篠原の学問論が含意されている。こうした観点から見ると，篠原はナトルプを批判的・対立的に受容する中で，ナトルプを他の学知との接続に開いているように見える。実際，『本質』の分析において，同じ新カント派マールブルク学派のコーヘン，バーデン学派のヴィンデルバントやリッカート，新カント派外に属するディルタイ，シュライアマハー，シュプランガー，ヴェーバーなど，様々な人名の登場がナトルプ引用の前後に確認された。これも本稿ではまだ人名の確認に留まるのだが，今後の研究で，ナトルプと他の学知との架橋の様相を究明し，篠原の新カント派受容のさらなる理解を得たい。

付記　本研究はJSPS科研費23K02061の助成を受けている。

また，本稿は執筆者の三人が原稿全体を確認し検討しているが，執筆にあたっては，宮本がⅠ，Ⅱ－１．１，Ⅱ－１．２，Ⅱ－２－第５章，Ⅲ－１及び添付表１・２・３を，深見がⅠ，Ⅱ－２導入，Ⅱ－２－第９章，Ⅱ－２－結果の要約，Ⅲ－２を，佐藤がⅡ－２－第３章を担当した。

Ⅳ．参考文献

ヴィルマン著，竹田清夫・長谷川栄訳（1974）『陶冶論としての教授学』明治図書

梅根悟編（1970）『批判的教育学の問題』明治図書

大橋容一郎（2016）「心理学的認識論と哲学的認識論」『思想』1106，104-125頁

大橋容一郎（2018）「文化主義の帰趨――新カント派の哲学と「文化主義」」『思想』1135，220-238頁

小笠原道雄・田中毎実・森田尚人ほか（2014）『日本教育学の系譜』勁草書房

小笠原道雄・森田尚人・森田伸子ほか（2020）『続・日本教育学の系譜――京都学派とマルクス主義』勁草書房

沖田行司編（2019）『新編 同志社の思想家たち 下』晃洋書房

勝部健三（1925）『新カント学派の教育学説』大村書店

木内陽一（1994）「実験教育学から新カント派哲学へ――明治末年・大正期における篠原助市の外国教育学との取り組みについて」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』９，27-41頁

木内陽一（2001）「篠原助市教育学と朝永三十郎の西洋哲学史研究」『比較思想研究』28，82-89頁

木内陽一（2010）「解説・略年譜」篠原助市『篠原助市著作集』学術出版会　第７巻，12-13頁

京都大学百年史編集委員会編（1998）『京都大学百年史』https://reposit-ory.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/152993

篠原助市（1930）『教育の本質と教育学』教育出版会

篠原助市（1956）『教育生活五十年』大空社

篠原助市『篠原助市著作集』学術出版会　第１- ７巻

鈴木篤（2023）『日本における教育学の発展史』九州大学出版会

ナトルプ著，篠原陽二訳（[3]1958:1954）『社会的教育学』玉川大学出版会

宮本勇一・佐藤宗大・深見奨平「篠原助市における「開いた体系」としての教育学――自立的科学への逆説的理路」『教育学研究』第88巻第２号，79-90頁

矢野智司（2021）『京都学派と自覚の教育学』勁草書房

渡部政盛（1922）『新カント派の哲学と教育学説』啓文社

Natorp, P. ([5]1922: 1899) Sozialpädagogik. Stuttgart: Frommanns Verlag.（BB014019）

添付表１　篠原助市年表[11]

年月日	齢	出来事
1876年６月６日	0	誕生
1902年４月10日	25	東京高等師範学校　入学
1906年４月12日	29	福井県師範学校教諭・主事
1913年９月	37	京都帝国大学文科大学哲学科　入学
1916年７月10日	40	同大学卒業
1916年９月13日	40	同大学大学院　入学
1919年５月21日	42	東京高等師範学校教授（京大退学）
1920年８月初旬	44	手塚岸衛（千葉大附属小）篠原に指導仰ぐ
1922年２月	45	米国留学（３月５日着） ※家族の病気のため英国行きを断念７月28日ニューヨーク発８月20日横浜着
1922年６月	45	『批判的教育学』『教育辞典』出版
1922年12月10日	46	西回り（上海・香港・シンガポール・コロンボ・マルセイユ）経由で入欧（翌年１月22日）
1923年１月25日	46	１－４月ベルリン：シュプランガー訪問 弟子ビルケマイヤーに個人教授を受ける 　　マックス・シェラーを知る ５月：マールブルク着　ナトルプ訪問 ６月23日：ハレ着　フリッシュアイゼン＝ケーラー訪問 　　シュライアマハーを詳しく知る ６月25日：ライプツィヒ着　リット訪問 ６月28日：イェナ　オイケン・ライン訪問 ６月29日：ライプツィヒ　フォルケルト訪問 日付不明：ロンドン　妻死去に伴い帰国 ９月初旬：横浜着
1923年10月11日	47	東北帝国大学法文学部教授
1928年末～29年５月のあいだ	52	学位論文執筆，提出 (1930年１学期末　教授会通過)
1930年４月	53	東京文理科大学教授 ナトルプ『社会的教育学』，デューイ『民主主義と教育』，ルソー『エミール』講義
1930年９月	54	『教育の本質と教育学』刊行
1933年９月	57	京都帝国大学で普通講義担当（11月まで）
1934年９月１日	58	文部省入省　教育調査部長
1934年９月12日	58	文部省　文政審議会幹事
1936年１－２月	59	京都帝国大学　ヴィルマン特殊講義
1936年９月８日	60	日本諸学振興委員会発足　常任委員
1937年６月19日	61	文部省辞表提出（翌年５月26日まで嘱託職員として継続）
1938年７月25日	62	『教育断想』刊行
1939年１月26日	62	『教育学』刊行
1940年１月13日	63	文部省国民学校教科調査委員　任命
1940年３月	63	日本諸学振興会辞任 東京文理科大学学長推薦を辞退
1941年４月１日	64	東京文理科大学　退官
1957年８月２日	81	死没

添付表２　篠原助市・陽二文庫調査結果・書誌情報（24点）

○カント関連著作　コピーした資料　６点

京大図書館ID			書籍名	研究備考
BB01971008	134.2||K 13||(3)	BA11988788	Kritik der reinen Vernunft / von Immanuel Kant ; herausgegeben von Albert Görland. -- Bruno Cassirer, 1922. -- (Immanuel Kants Werke / in Gemeinschaft mit Hermann Cohen ... [et al.] ; herausgegeben von Ernst Cassirer ; Bd. 3).	表紙にS.Shinohara 5. Feb. 23 Berlin 全面に読み込み跡 1933.3.20読了の模様
BB01971413	134.2||K 13||(4)	BA11988904	Schriften von 1783-1788 / von Immanuel Kant ; herausgegeben von Artur Buchenau und Ernst Cassirer. -- Bruno Cassirer, 1922. -- (Immanuel Kants Werke / in Gemeinschaft mit Hermann Cohen ... [et al.] ; herausgegeben von Ernst Cassirer ; Bd. 4).	表紙にS.Shinohara 5. Feb. 23 Berlin プロレゴメナ書き込みあり末尾：1931十月二十二日午後十二時分　於京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方 道徳形而上学基礎づけ書き込みあり　末尾：昭和七年（1932）二月十四日午後六時分 於京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方
BB01971427	134.2||K 13||(5)	BA11989033	Kritik der praktischen Vernunft / herausgegeben Benzion Kellermann . Erste Einleitung in die Kritik der Urteilskraft ; Kritik der Urteilskraft / herausgegeben von Otto Buek. -- Bruno Cassirer, 1922. -- (Immanuel Kants Werke / in Gemeinschaft mit Hermann Cohen ... [et al.] ; herausgegeben von Ernst Cassirer ; Bd. 5).	表紙にS.Shinohara 5. Feb. 23 Berlin 全面に読み込み跡 実践理性批判：昭和七年（1932）一月八日午後二時十分　於東京市外長崎町荒井一八五〇自宅 判断力批判：初版序文：昭和七年（1932）四月十一日午後五時半　於東京市外長崎町荒井一八五〇自宅 第二部終わり：Erster Teil, Kritik der ästhetischen Urteilskraft ヲ除ク　とある（p.568）昭和七年（1932）九月二十六日午後六時半　於京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方
BB01971436	134.2||K 3||(6)	BA11989441	Schriften von 1790-1796 / von Immanuel Kant ; herausgegeben von A. Buchenau, E. Cassirer, B. Kellermann. -- Bruno Cassirer, 1923. -- (Immanuel Kants Werke / in Gemeinschaft mit Hermann Cohen ... [et al.] ; herausgegeben von Ernst Cassirer ; Bd. 6).	表紙にS.Shinohara 5. Feb. 23 Berlin 単なる理性の限界における宗教　第一部に書き込み, 第三部も少し（昭和六年二月九日　？？？？？ここまでと書かれている）
BB03101187	134.2||K 13	BA62759325	純粋理性批判 / イマーヌエル・カント著 ; 天野貞祐譯 ; 上巻. -- 岩波書店, 1929. -- (岩波文庫 ; 418-421).	全体にわたって線がびっしり　一九二九年十二月三日午後九時十分於　京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方 痛みが激しいので非常に読み込んだ模様？下巻が存在しないが紛失？
BB03785302	134.2||K 13	BB06942934	Kritik der reinen Vernunft / von Immanuel Kant ; mit einer Einleitung über Kants Leben und Werke von Robert Zimmermann. -- Bibliographisches Institut, 19--. -- (Meyers Volksbücher).	出版年不詳　丸善で購入のみわかる すごい量の書き込み・メモ　？などが多いことからも初読に用いられた模様 途中（p.122）におそらく四年四月とあるので，1915年か1929年（大正か昭和か）。ところどころ読み飛ばされている模様

○ナトルプ関連著作　コピーした資料　13点

京大図書館ID			書籍名	研究備考
BB01180585	134.833||N 21	BA36906025	Volkskultur und Persönlichkeitskultur : sechs Vorträge / von Paul Natorp. -- Quelle & Meyer, 1911.	Klebsという人が1917年に買った本を古本として購入した模様→1923（ほかのドイツ系の書籍がすべてこの年） ところどころ青線→篠原らしくないメモ・・・。不明
BB00015730	134.833||N 21	BA09841583	Sozial-Idealismus : neue Richtlinien sozialer Erziehung / von Paul Natorp. -- J. Springer, 1920.	表紙にS. Shinohara may 4. 21 tokyo Shibuya 陽二のコメント（インク？）　助市は鉛筆？ 27.11.2 2. p.m.再読了とかいてある。　1927年か1952年かは不明
BB03739002	134.833||N 21	BA16151803	Philosophische Propädeutik : allgemeine Einleitung in die Philosophie und Anfangsgründe der Logik, Ethik und Psychologie : in Leitsätzen zu akademischen Vorlesungen / von Paul Natorp. -- 4., wiederum durchges. Aufl. -- N.G. Elwert, 1914.	S. Shinohara Nv. 6. 1920 Shibuya Tokyo 1962.6.20午後四時五〇分？？？　京都市伏見区十字草地内町蒔森？？？住宅 陽二のみ読んだ模様
BB03637101	134.833||Sch 5	BB06000831	Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen : Sonderdruck Paul Natorp / herausgegeben von Raymund Schmidt. -- F. Meiner, 1923.	表紙上に　Herrn Professor S. Shinahara zu freundlicher ???ung ??? 2. Mai. 1923ナトルプ直筆のサインが入っている
BB00656705	140.1||N 21	BA22588850	Objekt und Methode der Psychologie ; : hbk, : [pbk]. -- J.C.B. Mohr, 1912. -- (Allgemeine Psychologie : nach kritischer Methode / von Paul Natorp ; 1. Buch).	S Shinohara 1923 Berlin 最初のMethodeのみ読んであとは見ていない様子　講義録
BB02154715	161.3||N 21	BA17171395	Religion innerhalb der Grenzen der Humanität : ein Kapitel zur Grundlegung der Sozialpädagogik / von Paul Natorp. -- 2., durchgesehene und um ein Nachwort verm. Aufl. -- J.C.B. Mohr, 1908.	S. Shinohara 1923 Berlin 昭和四年六月三日午後十時二十分　於　京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方 これがSozialpädagogikの最初の構想となった本とのこと

BB02871828	371.234||N 21	BA39688022	Genossenschaftliche Erziehung : als Grundlage zum Neubau des Volkstums und des Menschentums : Thesen nebst Einleitung / von Paul Natorp. -- J. Springer, 1920.	S. Shinahara 1923 Berlin 27. 12. 7 p. m. 3 →一九二七年12月7日なのか1952年かは不詳 メモは陽二っぽさが出ているが，不明。　27年のみこれが多いようにも見えるが…
BB02743013	371.234||N 21	BA16151632	Der Idealismus Pestalozzis : eine Neuuntersuchung der philosophischen Grundlagen seiner Erziehungslehre / von Paul Natorp. -- Felix Meiner, 1919.	S, Shinohara Sep. 1921 Shibuya Tokyo 昭和五年五月二十五日　午後九時三十分　於　京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方
BB02951346	371.234||N 21	BA30250394	Allgemeine Pädagogik in Leitsätzen zu akademischen Vorlesungen / von Paul Natorp. -- 2. durchgesehene Aufl. -- N.G. Elwert, 1913.	S. Shinohara may 23 Berlin とても深く読み込んでいる。訳という文字がたくさん見られるので，陽二なのか？　1937.11.17ごろに途中を読んでいる記録（p.31）。1961？
BB03743859	371.2345||N21	BA43092321	Pestalozzi : sein Leben und seine Ideen / von Paul Natorp. -- B.G. Teubner, 1909. -- (Aus Natur und Geisteswelt : Sammlung wissenschaftlich-gemeinverständlicher Darstellungen ; Bd. 250).	S. Shinahara 1Feb. 2nd. 11 Fukui 昭和五年五月九日　午後九時三十分 於　京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方 六年六月二十五日午前十時というなぐりがきも存在→大正六年？
BB01401961	371.3||N21	BA11620634	Sozialpädagogik : Theorie der Willenserziehung auf der Grundlage der Gemeinschaft / Paul Natorp. -- 5. Aufl. -- Fr. Frommann (H. Kurtz), 1922.	S. Shinohara 5. Feb. 1923 Berlin 昭和四年十月十九日午後九時十分於　京都市左京区浄土寺馬場町一五六西川政治郎方
BB02427584	371.3||N21	BA12958578	Gesammelte Abhandlungen zur Sozialpädagogik / von Paul Natorp ; 1. Abt.. -- Fr. Frommanns Verlag (E. Hauff), 1907.	S. Shinohara　Oct 1920Shibuya Tokyo 昭和五年十月七日午前九時十五分　Pestalozziに主に焦点化
BB03759267	371.4||N21	BA55695200	Pädagogische Psychologie in Leitsätzen zu Vorträgen : gehalten im Kursus wissenschaftlicher Vorlesungen für Lehrer und Lehrerinnen zu Marburg 1901 / von Paul Natorp. -- N.G. Elwert, 1901.	S. Shinhara　Nov. 6. 20Tokyo 読んだ形跡すこしあり

○ヴィンデルバント・リカート関連著作　コピーした資料　W2点　Rt3点

京大図書館ID			書籍名	研究備考
BB02427813	134.842||W72||(2)	BA54062435	Präludien : Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte / von Wilhelm Windelband ; Bd. 1, Bd. 2. -- 5., erw. Aufl. -- J.C.B. Mohr, 1915.	S. Shinohara April 29 1918 Kyoto Über Wesen und Wert der Tradition, Geschichte und Naturwissenschaftのみ目もあり
BB01930220	134.842||W 72	BA36457191	Die Blütezeit der deutschen Philosophie. -- 5., durchgesehene Aufl. -- Breitkopf & Härtel, 1911. --（Die Geschichte der neueren Philosophie : in ihrem Zusammenhange mit der allgemeinen Kultur und den besonderen Wissenschaften / dargestellt von Wilhelm Windelband ; 2. Bd.）.	S. Shinohara May 1923 Berlin Fichte Herbartの部分のみ書き込み
BB02445839	134.843||R42	BA09868182	Grundprobleme der Philosophie : Methodologie, Ontologie, Anthropologie / von Heinrich Rickert. -- Mohr, 1934.	S. Shinohara 1935 Tokyo 154-168のみ薄く読んだ形跡 読了日なし
BB02856656	134.843||R42	BA11365708	Die Philosophie des Lebens : Darstellung und Kritik der philosophischen Modeströmungen unserer Zeit / von Heinrich Rickert. -- 2. unveränderte Aufl. -- J.C.B. Mohr, 1922.	1924.7.11午後五時　読了 全体的に書き込み多め
B80197541056	134.843||R42	BA16266452	Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung　eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften /　van Heinrich Rickert. --　2. neu bearbeitete Aufl. -- Mohr, 1913.	S. Shinohara Nov. 1915 Osaka 大正五年九月十九日（廿九日の可能性？）　午後二時十分

添付表３　篠原助市読書歴年表

※篠原陽二と思われる読書歴については斜体で表記して区別する。

年月日	齢	出来事	読書歴
1876年６月６日	0	誕生	
1906年４月12日	29	福井県師範学校教諭・主事	
1913年９月	37	京都帝国大学文科大学哲学科　入学	
1914年（15 ？）	38		ヴィンデルバント　哲学入門（独）―西田講義
1915年４月			カント　純粋理性批判（独・文庫版）読了―西田との輪読会
1915年11月19日	39		カント　実践理性批判（独・文庫版）読了
1915年夏			ナトルプ　精密科学の論理的基礎（独） ヴィンデルバント　プレリュディーン（１・２）（独） コーヘン　純粋認識の論理学（独）
1915年秋？			ヴィンデルバント　プレリュディーン（独）―西田講義
1916年７月10日	40	同大学　卒業	
1916年９月13日		同大学大学院　入学	
1916年９月19日			リッカート　自然科学の概念形成の限界（独）読了
1917年６月25日	41		ナトルプ　ペスタロッチ（独）部分読了
1919年５月21日	42	東京高等師範学校教授（京大退学）	
1920年８月初旬	44	手塚岸衛（千葉大附属小）篠原に指導仰ぐ	
1920年８月			ナトルプ　社会理想主義（独）読了
1922年２月	45	米国留学（３月５日着） ※家族の病気のため英国行きを断念 ７月28日ニューヨーク発８月20日横浜着	
1922年６月	45	『批判的教育学』『教育辞典』出版	
1922年12月10日	46	西回り（上海・香港・シンガポール・コロンボ・マルセイユ）経由で入欧（翌年１月22日）	
1923年１月25日	46	１－４月：ベルリン:シュプランガー訪問 弟子ビルケマイヤーに個人教授を受ける マックス・シェラーを知る ５月：マールブルク着　ナトルプ訪問 ６月23日：ハレ着　フリッシュアイゼン＝ケーラー訪問 シュライアマハーを詳しく知る ６月25日：ライプツィヒ着　リット訪問 ６月28日：イェナ　オイケン・ライン訪問 ６月29日：ライプツィヒ　フォルケルト訪問 日付不明：ロンドン　妻死去に伴い帰国 ９月初旬：横浜着	２月　カント全集等非常に多くの書籍を購入し，日本に送付（篠原回顧録296-297）

1923年１月			ナトルプ　社会的教育学（独）読了？
1923年10月11日	47	東北帝国大学法文学部教授	
1924年７月11日	48		リッカート　生の哲学（独）読了
1927年11月２日	51		ナトルプ　社会理想主義（独）再読了
1927年12月７日			ナトルプ　共同体教育（独）読了
1928年 末 ～ 29年５月のあいだ	52	学位論文執筆，提出 （1930年１学期末　教授会通過）	
1929年３月			*カント　純粋理性批判上（日・岩波）読了*
1929年６月３日			*ナトルプ　人間性の限界における宗教（独）読了*
1929年10月19日	53		*ナトルプ　社会的教育学（独）読了*
1930年４月		東京文理科大学教授 ナトルプ『社会的教育学』，デューイ『民主主義と教育』，ルソー『エミール』講義	ナトルプ　社会的教育学（独）講義用で読書
1930年５月９日			*ナトルプ　ペスタロッチ（独）*
1930年５月25日			*ナトルプ　ペスタロッチの理想主義（独）*
1930年９月	54	『教育の本質と教育学』刊行	
1931年２月９日			*カント　単なる理性の限界における宗教（独全集６）第一部・第三部の一部を読了*
1931年９月26日	55		*カント　カッシーラーによる「カントの生涯」（独全集11）*
1931年10月22日			*カント　プロレゴメナ（独全集４）読了*
1932年１月８日			*カント　実践理性批判（独全集５）読了*
1932年２月24日			*カント　道徳形而上学基礎づけ（独全集４）読了*
1932年４月11日			*カント　判断力批判（独全集５）第一版　序まで読了*
1932年９月26日	56		*カント　判断力批判（独全集５）第二版　序と第二部読了*
1933年３月20日			*カント　純粋理性批判（独全集３読了*
1933年９月	57	京都帝国大学で普通講義担当（11月まで）	
1934年９月１日	58	文部省入省　教育調査部長	
1934年９月12日		文部省　文政審議会幹事	
1936年１－２月	59	京都帝国大学　ヴィルマン特殊講義	
1936年９月８日	60	日本諸学振興委員会発足　常任委員	
1937年６月19日	61	文部省辞表提出 （翌年５月26日まで嘱託職員として継続）	
1937年11月17日			*ナトルプ　一般教育学（独）一部のみ読書*
1938年７月25日	62	『教育断想』刊行	
1939年１月26日		『教育学』刊行	
1940年１月13日	63	文部省国民学校教科調査委員　任命	
1940年３月		日本諸学振興会辞任 東京文理科大学学長推薦を辞退	
1941年４月１日	64	東京文理科大学　退官	
1957年８月２日	81	死没	

V．注

[1] 篠原助市自身の手による人生の回顧録である『教育生活五十年』（篠原1956）の末尾につけられた年表はそのほとんどが間違っており，篠原の年表の精細な年表作成は篠原助市に関する基礎研究の急務である。ただし，篠原自身の回顧にも，出来事が前後して書かれたり，時期が不整合となる部分も少なからずある（例えば京都帝国大学入学を篠原の回顧通りにたどると1912年となるが，京都帝国大学時代の記述からは彼の入学は1913年となる。大学時代の受講履歴や活動履歴も前後するところがある）ため，厳密な特定が困難な部分もある。本稿末尾の年表は，回顧録，先行研究，簡潔な時代考証を重ね合わせて再構成した篠原の精細な年表である。歴史学的考証の余地はまだ多いため，トライアンギュレーションは重要な課題である。

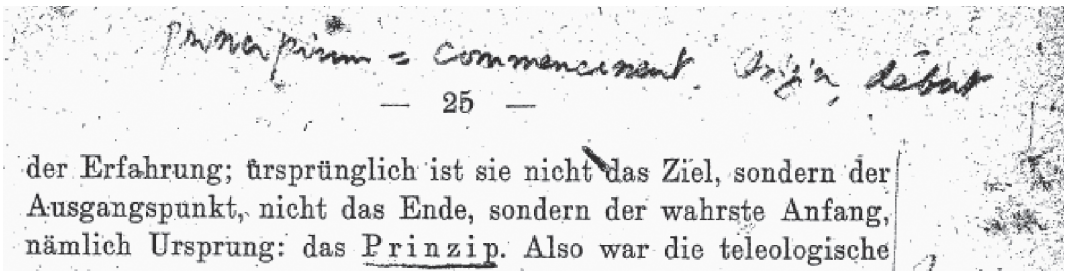
[2] 伊東延吉（1891-1944）は内務省から文部省入省後，学生部長（1929-1934）思想局長（1934-1936）を務め，同志社大学の人事介入などを行った。同志社史では「時流にのったファシスト」と称されている（沖田2019，159-162頁）。篠原も「伊東次官の従来のやり方を知悉している」と，嫌悪ある記述で回顧しており，「「今こそ時が来た」と伊東次官就任の夜，辞表を認めて，翌朝次官に提出，取次を乞うた」とある（篠原1956，377頁）。

[3] 矢野によれば，篠原の卒論は「西田の指導によって」作成され，「西田の純粋経験論とその発展形の自覚論とを新カント学派の用語で捉え直したもの」であり，学位となる『本質』もまた「二〇年代に深化した西田の自覚論に負っている」と捉え，更に篠原学説の中心命題である「自然の理性化」も「新カント学派に基づいた〔中略〕原理などではなく，「自己が自己に於いて自己を見る」という西田の自覚論に基づいた原理」であると考えている（矢野2021，54頁）。ちなみに西田に卒論の指導を受けたと矢野が考える根拠は，篠原（1957）の184頁の記述と考えられるが，篠原は西田からは小冊子を借りることを勧められたほか特に言及はなく，しかも「先生は恐らく絶対の自由を問題とせられたのであろうが，私はそこまで気が付かなかったか，折角おすすめの冊子を読んでも絶対自由をつかみ得なかった」と書いており，西田の言っていることを理解できていないと明言している。その直前には朝永から受けた指導がより厚く記述されている。なお卒業論文の審査は西田，朝永，小西である。

[4] 篠原は1930年4月に東京文理科大学に着任してから，現在の豊島区南長崎に新居を構えた。200坪の非常に大きな家であったが，1945年4月13－14日の東京大空襲で全焼した。しかし「東京の宅は書斎のみ残り，応接室その他は影もなく，唯門だけ元のまま。泰三と陽二夫妻は空襲の翌日帰り，書斎の残り居るに驚きしも，一夜を庭に明かし，書斎の内部の冷えるのを待って，鍵で前方の鉄扉をこじあけて入ってみると凡て元のまま，天上からつるした電燈とかストーブのマンツルピースなどは動いた様子さえなかったそうである」（篠原1956，401頁）と，書斎だけは無事であったと書かれている。埼玉の疎開については記述がない。書籍が京都にいつ移されたのかの記載はない。そのため，篠原の若いころの書籍がいつ紛失したのかは不明のままである。

[5] なお，京都帝国大学は1921年から年度の開始を，それまでの9月から4月に変更している。京都大学百年史編集委員会編（1998），289頁

[6] 1900年代中盤（1908？）ごろの回顧には，ナトルプによる主意主義的教育思想の台頭が，そのヘルバルトの主知説への反抗として次の様に説明されている。「当時の教育思想の大勢は，「ヘルバルト及びその一派の主知的，受動的傾向に対する主意的発動的な反抗」なる一語に要約せられるであろう。ドイツのナトルプは，ペスタロッチ精神の復興によってヘルバルトの教育学を主意的に改造しようと試み，既に名著「社会的教育学」と同年に，「ヘルバルト，ペスタロッチと現時の教育学の課題」P. Natorp; Herbart, Pestalozzi und die heutigen Aufgaben der Erziehungslehre.（1899）を公にし，ずっと後に，ヘルバルト派のフリューゲル等と激しく論戦した。彼の攻撃の鋒はヘルバルトよりもヘルバルト派に対して一層猛烈であった。」（篠原1956，100-101頁）。なお，篠原は「以上の主意的立場について私自身どう考えたか。私はルソーやペスタロッチやヘルバルトや，フレーベル，フィヒテ，ナトルプ更に古代のプラトン，アリストテレス等について少しは聞き覚えていた。だがこの聞き覚えたるや，言わば皮膚の表面に触れたに止まり，皮下の血脈組織，骨格等については何の知るところもない」と述べ，しかも同時期に神経衰弱になったことから自然と哲学から心理学に向かったと述懐している（同上，104-105頁）。その後彼が「経験的，実際的探求から主意的な内面考察」へと興味を移したのは，1912年ごろとされている。だがそこではケルシェンシュタイナーの勤労学校の考察が主を占めている。


Principium = commencement, Origin, début

— 25 —

der Erfahrung; ursprünglich ist sie nicht das Ziel, sondern der Ausgangspunkt, nicht das Ende, sondern der wahrste Anfang, nämlich Ursprung: das Prinzip. Also war die teleologische

図７　篠原のメモ（Natorp 1922: 25）

7 原理Prinzipとは出発点の意味であるという言葉の理解もまたナトルプから得ているようである。社会的教育学（Natorp 1922）の25頁に篠原助市らしき太字の鉛筆で，Prinzipに下線が引かれ，上部余白に，Principium = commencement, Origin, début とメモしている（図７）。ナトルプの本文は「これは本来的に目標ではなく，出発点（Ausgangspunkt）であり，終わりではなく，むしろ本当の始まり（Anfang），いわば根源（Ursprung）である。つまり原理である。」（傍点は本文隔字強調）

8 この引用は社会的教育学ではなく『哲学と教育』175頁からの引用である。

9「カント派の教育学者達には，今問題にしている目的にとって，カントが定式化した心的諸能力の図式が最も手近な参考手段であった。［…］心的諸能力の多様性を否定するヘルバルトは，それゆえこのような方法をも退け，個々の諸能力の形成への指導を，処方集にたとえて次のようにあざ笑っている。精神の陶冶に関する学は，次から次へと忘れはせぬか，そこねはせぬかと恐れる顧慮や懸念や渓谷の集積のような観を呈してしまう，と。［…］思想圏という概念で，探究は望んでいた関係点を見出す。知識から意欲へ，思想圏から品格へと道を見出すべきであるという要請は，たとえ人々はこの道をヘルバルトよりもより長く見積るとしても，そのまま保持される。」（ヴィルマン1974，64頁）。

10「京都大学時代耽読したヴィンデルバントのプレールディエンで，彼が教育は自然人を文化人に高め自然人を歴史人たらしむるにあると述べているのに共鳴し，この共鳴は余韻嫋嫋もう十六年も私の胸に糸を引きつづけていたのであるが，昭和十年頃，ニコライ・ハルトマンが名著「精神的存在の問題」で，教育は恰も有機体の生殖のように，人における歴史の生産である（と言ったような言葉であったと思う。大戦で原著消失したので照合することができない）とあるのを見て，［プ］レールディエン以来の余燼は急に煽られ，「個性の歴史化」という大命題が深い根をおろすに至った」（篠原1956，345-346頁，西田にヴィンデルバントのPräludien講義を受けたのは173頁）

11 年表の作成に当たって，矢野（2021），篠原（1957），鈴木（2023），梅根（1970），木内（2010）を参照した。なおこれらの間で齟齬がある部分については，回顧録の文面及び前後の文脈，歴史的事件との照らし合わせ（二･二六事件や関東大震災など）を通して行った。